〈研究ノート〉

エコノミクス
第2巻第2号
1997年11月

マルクスの神様を見失った社会主義者

—滝沢「神人」論を手懸かりに—

佐々野謙治

はじめに

こういわれています。マルクスにとって経済学・『資本論』は，「世俗的神についての神学」であった。彼は「擬似宗教的現象としての資本主義」を論じ，物神崇拝」という「俗流の宗教」の批判的解明に努めた，[1]と。ところで，その宗教は克服されているのか。否，ますますその勢力を広げ，いまやかつての社会主義の国の人々も，その信者となりつつあります。何を信じようと，それは自由でしょう。しかし，後に述べますが，そういって済ませるわけにもいかない状況(？)になっています。

そこで，「物神崇拝」・「俗流の宗教」に対するマルクスの批判的解明を取り上げて，検討してみたいと思います。彼は，その宗教のよって出てくる根源を，どこに見ていたのか。また，その宗教と人類史との関連を，どのように見ていたのか。この点の整理・検討を，まずは岩瀬文夫先生のマルクス研究から抜き出し，[2]その後で，滝沢克己先生の神人論を手懸かりに，私なりに行うことにします。そうすることで，「物神崇拝」・「俗流の宗教」を克服する道を捜してみるつもりです。

ちなみに，「物神」とは，かのフォイエルバッハが天上の神様（「人間の自己疎外の神聖な姿」）を葬った後，地上に現れた神様（「人間の自己疎外の神

聖でない姿」)です。それは，人間の物質的欲望を刺激し※，人間をもっと多くを，もっと先へ，と駆りたてる神様です。後に見ますが，それは資本主義が生み出し，そして自らを支えさせてきた神様です。しかるに，その行きづまりが云々されている昨今です。やはりほおっておくわけにはいかないでしょう。「いらぬお世話」かもしれませんが。

※ いつかの研究会で，物質的欲望への刺激（賃金インセンティブ）が，生産力の増大に結びつかなくなった，という話を聞きました。しかし，これまでだって人間は，物質的欲望のみに刺激されて，経済活動をやってきたわけではないでしょう。その欲望のみに基ずくものであれば，もともと今日のような経済発展は生じなかったのではないか。パンは2・3個もあれば十分だからです。ですから，人間はパンへの物質的欲望によってのみ，パンづくりをやってきたのではない，ということです。否，パンのみに非ずという，こののみに非ずという，宗教の係わる部分を求めて，少なくともそれとのつながりを感じたから，人間はパンづくりに励んだ。こう説いたのはウェーバーです。

ちなみに，パンづくりに，あるいはパンに宗教が結びつかない社会では，パンづくりを犠牲にしてまで，宗教に励んでいます。ねんごろな葬儀に，村をあげて3カ月も費やすところがあるとか。こちらの社会では高々2・3日。実に味気ないものです。どちらの国が豊かなのか，わからなくなります。とまれ，もし，人々がパンのみを求めているのだったら，どうしてブランドの高価な商品が売れるのか。売れない腹いせに値をつり上げたら，急に売れ出した商品がある，とも聞きました。スミスならば「虚栄」，ヴェブレンならば「見栄」，という概念で，そこを説くでしょう。要するに，人間はパンそれ自体ではない何かを，パンに求めている，ということです。パンへの物質的欲望を「偽装された宗教的欲望」と見定めたのはルイスでした。パンを神様に見立てて崇拝しているということです。この疑似宗教の世界が資本主義です。

ついでに記しておけば，会社を神様と見立てているのが，いわゆる「会社主義」ではないか。これも一種の物神崇拝という宗教です。私たちは，西欧的個人原理を体験していません。したがって，まだ聖なるものが個人にまで降りてきていません。聖俗未分離のまま，家に宿っていた聖なるものが，会社に移った。これが会社主義でしょう。会社のためには死ねても，自分のためには死ねない。ロッキード事件の時のことです。会社の悪口をいいたて，自己の有能ぶりをまくしたてていたあちらの方。会社は永遠です，と会社のために殉じたこちらの方。見事に対照的でした。会社主義のすべてが，悪くはないでしょう。個人原理だってその行きづまりが云々されています。しかし，その原理を一度くぐらない限り，会社主義の良い点も生きてこないのではないか。昨今の企業人（個人）の自殺は，一種の会社による殺人かもしれません。会社

という物神，会社教の克服が求められるゆえんです。

1　岩瀬先生のマルクス研究から

人をただ単に自由な「主体」と考えるような人間把握からは，「物神性」の認識は出てこない。かくいう岩瀬先生は，続けて次のように述べています。

〈なぜなら，「宗教」が人間存在の二重構造と不可分であったように，商品の「物神性」も，経済生活を営むところの人間自身の，分裂の可能性を含む二重性と切り離すことができないからである。すなわち，経済生活において，人間（主体）が何らかの形においてそれに「関係」し，それに従うほかはない本質的規定をその身に負うている客体的存在であるという，そのような意味で二重の存在でないならば，「物神性」の問題はそもそも存在しえないということである。もしそうでないなら，「人間」は常に主体であり，「物」もまた常にその人間によって「利用」され，「動か」されるところの客体であるにすぎず，「人間」と「物」との間に主・客転倒の生ずる余地は全く存在しない。「人間」が「物」に支配されるという「奇怪な」事態が生ずるのも，元はといえば，「人間」主体自身が根源的に支配され・規定された・客体的存在であるという，根本的事態が存在しているからなのであり，転倒的支配（「物神性」）という現象は，「人間」（主体）の本質的・客体的規定との分裂関係における，この根源的支配の「実現」・貫徹形態にほかならないのである。言い換えれば，「人間」と「物」との間に主・客転倒が生ずるのは，その転倒以前に，「人間」自身の「自己自身」との「関係」において主・客転倒が生じている，その必然的な結果にほかならないということである。「人間」は単なる客体的存在ではなく，自由に選び，創造し，生産する主体であるが故に，本質的規定と分裂し，それから背離するという事態が発生しうる。だがそれはあくまで相対的な分裂・背離でありうるにすぎず，本質的規定の絶対的支配を，「人間」は免れることができない。そしてその場合，その絶対的支配は，分裂し，背離した「人間」に対し，結果的に，「人間の手の産物」＝商品を介し，本質的規定にいわば引きもどすという外的強力の形をもって，作用するほかないこととなるのである。〉

では，以上にいう「本質的規定」とは何か。岩瀬先生は，ここに「労働の二重性」という概念を引いています。私は，それをマルクスの「労働の分割」※という概念に置きかえ，以下，岩瀬先生のいうところを見ていくことにします。ちなみに，「労働の分割」とは，「労働の二重性」という概念と表裏一体のものです。それは，衣食住に係わる生産物を過不足なく供給できるように，適切な比率で「労働を分割」するということです。それは，人間存在の，したがって社会存続の，基本条件であり，マルクスによれば，一つの自然法則です。

さて「労働の分割」という本質的規定に対応する現実的・表現形態には，基本的には三つしかない。かくいう岩瀬先生は，『要綱』から次の行文を引いています。

「人的存在［従属］関係（最初は全く自然生的）は最初の社会形態であり，そこでは人間の生産性はごく小範囲でまた孤立した地点でだけ発展する。物的依存［従属］性のうえにきずかれた人的独立性は第二の大きな形態であり，そこで一般的な社会的物質代謝，普遍的な交わり［関連］，全面的な欲望，普遍的な力能といった体制がはじめて形成される。諸個人の普遍的な発展のうえに，また諸個人の社会的力能としての彼らの共同性・社会的な生産性を従属させることのうえにきずかれた自由な個性は，第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくりだす。」

続けて岩瀬先生のいうところを聞くことにします。

く『資本論』首章第四節の「商品物神性論」について見れば，第一の段階は，「ロビンソンの島の生活」の分析に続く，「暗いヨーロッパの中世……」以下の分析に対応していると言ってよいであろう。「ここではわれわれは独立する人のかわりに，誰も彼もが依存［従属］しあっているのを見出す，――農奴と領主，臣下と君主，俗人と僧侶。人的存在［従属］が，物質的生産の社会的諸関係を，そのうえにきずかれた生活諸領域と全く同じように特徴づけている」とマルクスはそこで述べている。そして，このような「人的存在［従属］の段階にある社会に「物神性」は生じえない。なぜなら，人類史の第一段階が，このように，「個人相互間の（自然生的および政治的な）上位下位の位階的関係」という「人的依存［従属］の社会にならざるをえないのは，「客

体的主体」としての「人間の生産性」（＝主体性）が「未成熟」であることに基づくものであり，したがってこのような社会においては，あたかも動物が，「生命活動と直接に一つ」であり，「ただ一重の生活を送るだけ」であるのにも似て，彼らの物質的生産労働は，「客体的主体」としての人間の労働の根源的・本質規定から「離脱」することなく，それにいわば無意識的・消極的に照応していたということができるからである。〉

〈第二段階は，言うまでもなく，『資本論』の商品物神性論」の直接の対象である，「物神」に支配されるところの「近代社会」そのものである。マルクスが，「物的依存［従属］性のうえにきずかれた人的独立性」と言っているように，そこにおいて人間は，旧来の「自然生的および政治的な人的依存［従属］関係から自らを解放し，「独立」自由な個人として，動物とは異なる自らの主体性を自覚した。だがそれは本当の主体性ではなかった。なぜなら，彼らは「物神」に支配されねばならなかったのだから。何故なのか？　彼らは，旧来のいわゆる「人為的」束縛から自らを解放しつつ，それと同時に，言うところの「主体性」・「個人の独立・自由」そのものの背後に潜むところの絶対に免れることのできない制約，すなわち，「客体的主体」としての人間の労働の根源的・本質規定（＝「労働の分割」）からも，自らを「解放」してしまったからである。つまり，人間は歴史の中で主体的な個人として「成熟」してゆく過程で，それに従うことによってのみ真に主体的でありうるはずの自己自身の根源的・本質規定から，我知らず（無意識的に）背離するという結果に陥ってしまったということである。〉

〈第三段階は言うまでもなく，『資本論』の「商品物神性論」における，「共同の生産手段をもって労働してその多くの個人的諸労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出するような，自由人たち」の社会に対応している。ここで決定的なことは，「自覚的」であることによって「自由」だということであろう。彼らは何を「自覚」するのか？　自己の主体的行為としての生産的労働が，それに従うほかはない自己自身の労働の根源的・本質規定を，である。そして，この「自覚」の成立にさいして，第二段階は決定的な意味を持っているであろう。何ものにも妨げられることなく，自由に主体的に経済的生活を営んでい（るつもりでい）ながら，その実，彼らは決して本当に自

由でも主体的でもありえなかった。彼らが「主体的」に作り出す物（客体）の主体化（＝「物神性」）と，彼ら自身の客体化，この「奇怪な」事態の徹底的な省察から，彼らがただ単に自由な主体であると思っていた自己自身の背後（根底）に，客体的規定（＝「労働の分割」）の厳存すること，そして彼らが「物神」によって支配されるのは，その自己自身の規定から背離しているからであるということ，したがって，「交換価値・貨幣の基礎のうえで，結合した諸個人による生産全体の規制を前提することほど，謝った，愚かしいことはない」ということ，こういうことを彼らは，第二段階を通じてはじめて「自覚」することができたと言ってよいであろう。〉

続けて岩瀬先生は以下のような注意を与えています。

〈念のためにここで注意しておかなければならないのは，前者にあっても「三段階」の関連は，絶対的な意味で不可避的な必然性（＝法則）なのではないということである。第一段階に第二段階が続くことは，人間＝社会の主体的「成熟」の過程で，ほとんど不可避的な傾向であると言うことはできるであろうが，しかし，それは決して人間という自然に由来する法則なのではない。そのようなものとしての法則は，主体的「背離」にもかかわらず，文字通り鉄の必然性をもって（すなわち，「物神性」という形態をもって）自らを貫徹せしめるところの根源的・本質規定そのものにある（逆に言えば，「物神性」こそは，そのような根源的・本質規定の厳存と，人間主体のそれからの「背離」という事態を明らかにする！）。同様に，第二段階から第三段階への推移も，単に必然的な法則と言ってすますことはできない。それは，社会成員一人一人の・社会的被規定性というよりもむしろ，彼ら自身の根源にきている彼ら自身の本質的規定の明確な［自覚］＝認識によって導かれる・その本質的規定＝法則に執拗に背反しようとする頑強な傾向に抗してなされるところの・すぐれて主体的な，人間＝社会の変革を媒介とするものなのである……。一応三段階と見なしうる人間＝社会の具体的現実諸形態も，たとえそれがどのようなものであろうと，（絶えず形を変えて発現の機をうかがう分裂・対立の可能性にもかわらず）その背後（根底）を貫くところの根源的・本質規定に照らして，仮借なき批判的検討にさらされねばならないということである。第三段階が法則的・必然的に到来するであろうという安易な希望，

また「第三段階」の現実的・具体的形態そのものが，基準たるべき本質的形態そのものであるかのような（繰り返し形を変えて立ち現れる）皮相な思考，かつてはもとより，厳密に言えば現在でさえ，われわれの中にもはや存在しないと言い切ることの決してできないこのような希望と思考を，「物神性」問題の根源的理解は根底から粉砕するものだと言うことができるであろう。〉

※「どの国民も，一年といわず二・三週間でも活動をやめれば死んでしまうであろうということは，どんな子供でも知っています。また，種々の欲望に対応する生産物量が社会的総労働の種々の量的に規定された分量を必要とするということも知っています。この一定の割合での社会的労働の分割の必要は，けっして社会的生産の特定の形態によってなくされうるものではなく，ただ，その現象様式を変えうるだけだということは自明です。自然法則は一般に廃棄されうるものではない。歴史的に種々に異なる諸形態のもとで変化しうるものは，かの諸法則が貫かれる形態だけです。」（K・マルクス『クーゲルマンへの手紙』大月書店，87－88頁）。

2　克服できなかった「物神性」

以上，岩瀬先生のマルクス研究から，私のおしゃべりに係わる部分を抜いてきました。それを私なりに整理・検討することから始めることにします。

さて，マルクスのいう「労働の分割」とは，衣・食・住に係わるものを，過不足なく供給できるように，労働を適切な比率で配分するということでした。これがマルクスの「神様」です。否，そこにマルクスは「神様」を感じとっています。また，人間存在のありようを「客体的主体」として把握しています。その確認のために，以下もう一歩ふみ込んで，「労働の分割」という概念を整理・検討してみたい，と思います。

マルクスのいう「労働の分割」とは，いわば「自然法則」ともみなされるもので，人間によっては少しも変えることのできないものです。人間は，それに絶対的に従い，その定めを生きるほかに術のない存在です。つまり，被造物，「客体」です。また，「労働の分割」は人間存在にとって絶対的なものであり，不変かつ本質的なものです。いわば原理・原則であって，それ自体で自らを表現・実現することはできません。人間が，それを何らかの「形態」

をもって表現・実現しなければなりません。でなければ，人間は生きていけません。その形態は可変ですし，また人間によって変えることのできるものです。この点において，人間は「主体」です。「労働の分割」をなすべく（主体），決定されている存在（客体），つまり「客体的主体」，これが人間です。ここには，かく決定した存在（神様）が想定されています。

ところで，「労働の分割」をなす形態の一つが，資本主義（市場）です。もう一つのそれが，社会主義（計画）です。したがって，そのいずれもが，相対的なものです。くり返しになりますが，「真に絶対的なもの」・「真の存在根拠」は「労働の分割」です。これは，人間が何らかの「形態」をもって必ず表現・実現しなければならないものです。かくして，ここにマルクスは，人間にかく命じた神様を感じとっています。

①「労働の分割」（それに命じたお方）は，人間がそれに従わなければならない，またそこからけっして離れることのできないものです。

②それは，何らかの形態を通して表現・実現される本質的なものです。形態は，あくまでその本質的なものの写しであって，両者は厳密に区別されるものです。けっして同じではありません。

③それは，人間の側から出たものではありません。また人間の側からは，少しも変えることのできないものです。いわば「自然法則」です。

こうして「労働の分割」（それを命じたお方）と人間の関係は，①「不可分」②「不可同」③「不可逆」です。これは，滝沢先生のいう「神人の原関係」（かの「絶対矛盾的自己同一」という概念は，ここにいう①と②を表現したものです），バルト先生のいう「インマヌエル」です。マルクスは「真の神様」（？）を感じとっている，といえるでしょう。

さて，「人間生存の定め」ともいえる「労働の分割」から，人間が離反（できると錯覚）し，行動するときに，不可避的に現れてくるのが，「物神」であり，「物神崇拝」という「俗流の宗教」です。しかるに，それが生じてくる根源は，人間本来の「客体的主体」という，その構造にあります。人間が単に「主体」であり，その所産（物）が単に「客体」だとすれば，その所産（物）に人間が支配され，それを崇拝するという宗教が，生じてくるはずがないか

らです。

つまり，こうです。「客体」としての人間は，「労働の分割」という本質的規定を，免れることはできません。しかし，「主体」でもある人間は，それができると錯覚し，本質的規定から離反し，行動します。ここに，人間を本質的規定につれ戻すべく，不可避的に現れてくるのが，「物神」です。この「物神」（市場）によって「労働の分割」がなされているのが，資本主義です。

こうして，資本主義社会に流布している「物神崇拝」・「俗流の宗教」は，社会主義社会になると消え去る，というのがマルクスの見解（？）でした。少なくとも，一般にはそういわれてきました。また，彼の「唯物史観」にそくしていえば，人間社会の歴史は資本主義から社会主義に向かう，と解されていました。つまり「必然の王国」から「自由の王国」へです。では，現実の歴史はどうであったのか。マルクスの予想どおりになったのか。

現実の歴史は，その予想とは逆に，社会主義から資本主義へと向かいつつあります。こうして，「物神崇拝」・「俗流の宗教」は，消え去るどころか，むしろ拡大しつつある，いってよいでしょう。しかし，それにしてもなぜなのか。マルクスに全く責任がなかったとはいえないでしょう。「客体的主体」という彼の人間把握に甘さがあったのではないか。否，もしかしたら彼も，「物神崇拝」・「俗流の宗教」を，単に下部構造の倒錯の反射，つまり「労働の分割」が「物神」（市場）によってなされている経済のあり方の反映，と考えていたのかもしれません。とすれば，下部構造の変革・社会主義の実現こそが，大事ということになります。つまり，この構造の倒錯さえ解決されるならば，「物神崇拝」・「俗流の宗教」は消え去るというわけです。

しかし，「物神崇拝」・「俗流の宗教」は，つまるところ人間本来の「客体的主体」という，その構造に起因する，とマルクスが解していたことは，たしかです。そうでなければ，すでに述べましたが，もともと「物神性」への認識は出てこないはずだからです。とすれば，たとえ社会主義になっても，否，体制のいかんを問わず，人間本来の構造に変化は生じないわけですから，何らかの「偶像崇拝」・「俗流の宗教」が生じてくることは，可能性としては十分にありうることです。

ちなみに，現実の社会主義を想起してみると，そこでは，「労働の分割」を

人間が「計画」によってやる社会主義経済のあり方に対応して，人間（政治家）が絶対視されていた，とはいえないか。「物神崇拝」ならぬ「人神崇拝」です。この宗教は概して，人間が主体性に目覚めていない，近代以前に現れるものです。たとえば，人的依存（隷属）によって，無意識的・消極的ながら，「労働の分割」がなされていた，封建社会の経済のあり方に対応してです。こうして現実の社会主義は，近代をよそおった封建社会であった，とはいえないか。やはり社会主義にいくには時期尚早だったのです。資本主義を経ていなかったのですから。マルクスのいうことを聞くべきだったのです。

とまれ，商品・貨幣という「物神」に支配されている資本主義に対して，貨幣ならぬ勲章で飾られた「人神」に支配されていたのが，現実の社会主義でした。とすれば，こうもいえるでしょう。資本主義と社会主義との間のかつての対立は，偶像崇拝者・似非宗教信者たちの間の対立であった，と。要するに，近代以前と同様近代も，宗教の時代・擬似宗教の時代であった，ということです。

なお，いわゆる資本主義者たちや，いわゆる社会主義者たちについては，こういってよいでしょう。彼らには，資本主義（市場）といえ，社会主義（計画）といえ，それらが相対的なものだという認識が，欠落していた，と。つまり，彼らは相対的なものを絶対視し，神様にしていた，と。ちなみに，彼らと違ってマルクスが絶対視していたのは，「真の存在根拠」とみなしていたのは，「労働の分割」（それを命じたお方）でした。こうして，マルクスの弟子たち，いわゆる社会主義者たちは，マルクスが感じとって指し示した「神様」を見失った人たちであった，といえます。いわば「存在の忘却者」（ハイデガー）たちです。この社会主義者たちが信じていたのは，「計画」，したがってそれに係わる政治家という偶像でした。

ちなみに，偶像はやがてその正体をあばかれ，引きずりおろされます。事実，そうなりました。いわゆる社会主義者たちの国は崩壊しました。現実の社会主義は，局面によっては，資本主義以上にひどかった。舞い上がる人間を，最小限度いましめる「物神」（市場）が存在しなかったから，それも当然であったかもしれません。現実の社会主義は崩壊してよかったのです。問題は，その後の歩みにあります。資本主義化し始めたということにあります。

これは，いわば歴史の退行です。否，一種の封建社会ともみなされた現実の社会主義からすれば，進化でしょう。とまれ，「物神崇拝」・「俗流の宗教」の時代に向かいつつあります。

かく向かうことで，経済の発展は期待できるかもしれません。「物神崇拝」・「俗流の宗教」は，人間の物質的欲望を駆りたて肥大化させるものだからです。しかし，それは，「エフルエント（過剰）な社会」（ガルブレイス）をもたらし，すでに先進諸国では，その使命をおえつつあります。否，その限界が云々されております。「環境汚染」とか「資源の枯渇」という問題がそれです。たしかに，宗教は自由でなければならないでしょう。しかし，「物神崇拝」・「俗流の宗教」の行き着く先が見えてきました。資本主義の行き着く先に，「人類の破滅」を云々する人さえ出てきています。やはり，「物神」を克服し，「市場」を「人間の手」にとり戻すことが必要だ，と思います。少くとも市場まかせはこまります。

とすれば，ここはやはり，マルクスが感じとっていた神様（「労働の分割」という本質規定）のもとに立ち帰るべきでしょう。かの「放蕩息子」にならって，「真の神様の御許」，つまり「真の存在根拠」へです。しかしそれには，マルクスの人間認識の甘さを，人間主体への過信を，反省する必要があります。つまり，もう一歩マルクスの人間認識をつめてみることが必要です。ここに求められるのは，かのルター・「神学上のスミス」ならぬ，「神学上のマルクス」です。

3　いわゆる「神学上のマルクス」

さて，「客体」とはいえ，人間には主体性が与えられています。「物神」（市場）に支配されるのではなくて，経済の運営・「労働の分割」は，やはり「人間」がやるべきでしょう。これが社会主義です。として，問題はこれから先にあります。社会主義においても，否，人間が「労働の分割」をやるわけですから，社会主義においてこそ，人間存在のありようが厳しく問われなければならないでしょう。「人間」が「物神」（市場）にとって代わろうというのですから，相当の覚悟・自覚が必要です。

私たち人間は,「労働の分割」という本質的規定を,わが身に負っている「客体」でした。しかし,私たち人間は,そのことを容易に忘れ,絶えずそこから離反し,自らが「主体」として立とうとする,やっかいな存在です。しかし,本質的規定を離れて,人間は生きることはできません。にもかかわらず,主体性への目覚めが高じて,自らが神様になろうとするわけです。この点,社会主義においても,変わりはないでしょう。否,社会主義こそ,その危険性があります。

資本主義の場合と違って,社会主義においては,「労働の分割」という本質的規定に私たちをつれ戻してくれる,「物神」(市場)が存在しません。かくして,人間が「計画」によって「労働の分割」をなすという社会主義経済のあり方に対応して,「政治家」という「人神」が現れる危険性が常にあります。こうして「人神崇拝」という「俗流の宗教」がはびこり,そうなると,「物神」(市場)といういわば歯止めがないだけに,ひどい結果になりかねません。現実の社会主義がそうでした。

ということを私たち人間は自覚し,不断に自らのありようを正していかなくてはなりません。相互に励ましあい,批判しあっていくということです。ちなみに,その批判を封じていたのが,その批判者を危めさえしたのが,現実の社会主義ではなかったか。「人神」のなせる業とはそうしたものです。さらに反省を続けます。

人間が意識的・積極的に「労働の分割」を計画という形態でやっていく。これが社会主義です。したがって,ここでは人間の主体性が尊重されるし,また尊重されなければなりません。もっとも,その主体性が諸刀の剣でした。十分な警戒が必要です。なお,忘れてはならないことがあります。ここにいう形態・計画は,「労働の分割」という本質の写しだ,ということです。けっして「労働の分割」そのものではありません。

とすれば,その形態・計画にはゆがみが生じます。少なくともその可能性が常にあります。したがって,そのゆがみを,不断に正していかなくてはなりません。この試行錯誤のジグザグの道,それが,あるべき現実としての社会主義です。いかに厳しくても,相互に励ましあい,助けあって歩かなければならない道です。その厳しさに耐えかねて,主体性を放棄したところに現

れたのが，かのファシズムではなかったのか。否，構造的にその危険性を常にはらんでいるのが人間でした。

ところで，マルクスには社会主義の青写真がない，といわれています。しかし，社会主義が以上見てきたようなものだとすれば，それは，こうだといって具体的に描き出しえないものでしょう。描き出すとすれば，ユートピアとしてです。しかるに，それを現実化しようとすると（現実化できないものだからユートピアと呼ばれるのでしょう），どこかに必ず無理が生じ，おかしなことになります。この意味で，ユートピアなど描かない方が賢明だ，といえます。その心得がマルクスにはあったということでしょう。

としても，社会主義においてなされる，したがって人間が「計画」によってなす「労働の分割」は，何を課題とし，いかなる方向でなされるべきなのか。それは時代に応じて，そのつど，人間に問われてくるものでしょう。それを感じとってこそ，それに答えてこそ，使命に満ちた人間の歩みも生じるはずです。人間とは問う存在にあらず，「応答する存在」（フランクル）だからです。経済思想史上の巨匠たちとは，そうした人たちではなかったのか。スミスにしてもマルクスにしてもそうでしょう。いま，ここに想起される人はヴェブレンです。

ヴェブレンが感じとった時代の課題とは，「浪費」と「無駄」の抑制でした。そういえば，ヴェブレンの神様は「製作本能」でした。これは生産の効率を愛する一方，「浪費」と「無駄」を嫌う神様でした。

いまや私たちは，「大量生産・大量消費」の時代を生きています。その前後にあるのは，「自然の大量採掘」，「自然の大量破壊」でしょう。こうした時代をもたらすのに一役かったのが，ケインズが持ち出した神様です。「節約」こそ美徳と説いたスミスに対して，ケインズは，「消費」こそ美徳と説きました。つまり，「消費（者たち）」が神様とされました。この神様はたしかに，1930年代の資本主義の危機を避けさせ，一層の発展をもたらしました。

それはしかし，「物神崇拝」・「俗流の宗教」の極地に咲いた「あだ花」ならぬ，「あだ神」でした。今日の市場を支配しているのは，この「あだ神」です。しかし私たちは，それがいかに修正・改良という厚化粧をほどこそうとも，この神様によっては救われない，ということに気付きはじめております。

人々の物ばなれが生じていると聞きます。

やはりいま，必要なことは，マルクスとヴェブレンの神様のいうことに耳を傾けるということです。こう聞こえてきます。「労働の分割」を「浪費と無駄」を避けるという方向で行いなさい。また，そのやり方を模索しなさい。

ちなみに，その際に何よりも必要なことは，滝沢先生のいわゆる「神人」，「不可分・不可同・不可逆」というかの「原関係」をけっして忘れない，ということです。そこに絶えず立ち帰りつつ，ここにいう課題を遂行する，ということです。人間は「主体」であるに先立って「客体」でした。人間はけっして真の主体・神様ではないのです。かの本質的規定・「労働の分割」に絶対的に服従，そく自由となる存在です。この「真の自由人」・「神人」がつくる社会，いわば「エデンの園」，それが，あるべき理念としての社会主義です。ここでは，「物神崇拝」はもちろん，「人神崇拝」という「俗流の宗教」は消えるでしょう。「インマヌエル」の世界ですから。

ところで，現実の社会主義の崩壊が云々されていたときのことです。テレビに出演していた和田春樹先生が，その崩壊の原因を尋ねられていたときのことです。質問への先生のお答えは，一言，こうでした。「悟っていなかったからです」（「神人」への目覚めがなかったからです）。全くいい尽くしております。しかし，これこそが難題，人類共通の課題です。

そこで，最後は希望のもてる話です。本当は希望などない，といい切った方がよいのかもしれません。しかし，ここが「おしゃべり」のおしゃべりたるゆえんです。希望のもてる話をしたい，と思います。しかし，近頃よく耳にする「思いの自己実現」という意味からではありません。「思いの自己実現」とは，たしかに私たちを元気づけてくれる（舞い上がらせてくれる）言葉です。しかし，これこそ自己を神様と見たてているということです。「不可分」はともかく「不可同・不可逆」という認識が全く欠落しています。希望をもてるということは，こちらからの思いではなく，希望がもてるようになっている，ということです。私たちにできることは，それを見つける，それに気付くということだけです。

さて私はすでに，近代以前はもちろん近代も，宗教の時代・疑似宗教の時代であった，と述べました。天上か地上か，聖なるものか俗なるものか，と

いう違いはあっても，人間は何らかの偶像を立て，相対的なものを絶対視し，崇拝してきました。意識的であれ無意識的であれ，人間はいつの時代でも神様を求めてきた，ということです。以下，少し長くなりますが，柴田秀先生の叙述を借りたい，と思います。

「これまでの人類史とは，まさしく真に絶対的ならざるものの絶対化の過程といってよいだろう。そしてこの真に絶対的ならざるもの・その意味で相対的なものの絶対化，それをかりに宗教性と呼んでよいなら，これまでの人類史はその全体が宗教性の時代であったといってよい。そして近代以前の非世俗主義の時代を宗教的世界ないし多かれ少なかれ宗教に立脚した世界とするなら，近代以降の世俗主義の時代をいわば疑似宗教の世界といいうるだろう。そのさいそのどちらも，宗教性つまりは非絶対・相対的なものの絶対化という赤い一本の線が，個々の例外は一応別にしてほぼ一貫して貫いているといってよいのだ」(3)。

ということに気付いたとすれば，いま私たちは，「真に絶対的なもの」・「真の存在根拠」，つまり「真の神様」（？）に出会える，そういうところに立っている，といえるのではないか。要するに，「物神崇拝」や「人神崇拝」という「俗流の宗教」から解放される可能性がある，ということです。

つまり，こうです。真の神様は，天上にもいなかった，地上にもいなかった。とすれば，残っているのは，私たち自身の脚下ということになります。「青い鳥」を捜し求める必要はなかったし，またその必要もない，ということです。「不可分・不可同・不可逆」という関係において，まさに私たち一人一人の脚下にいたのです。私とともに，「赤い一本の線」としてではなく，そのつど，一瞬，一瞬に存在してきたし，存在しているし，存在し続けています。天上とか地上という外に，また私たちの内に，神様を探す必要はないということです。私たち一人一人の脚下に，いま，ここにいます。

滝沢先生はいわれます。それ（「神人」）に気付くこと，それに目覚めること（それを促すのが真の宗教です），ただそれだけのこと，「ただの人」として生きることだ，と。しかし，すでに述べましたが，これこそが難題，人類共通の課題です。としても，マルクスにならっていえば，こうです。人間は自らが解決できる問題だけを課題として出す，と。つまり，課題として出し

たということは，人間は，すでに解決策を持っている，ということです。とすれば，希望はもてるかもしれません。負えない重荷は負わされていない，ということです。

ちなみに，「(神人の) 原関係」，「インマヌニエル」への目覚めをめぐって，この一点において，かのバルト先生と滝沢先生の違いが生じます。つまり，イエス・キリストなしにもその目覚めはありえると考えたのが滝沢先生，ありえないと考えたのがバルト先生です。そこをぎりぎりつめたときのバルト先生の立言はこうだった，といわれています。「理論としては可能だが，現実的には不可能」。ここには，有無をいわさず私たちを深く規定している文化，その違いを感じます。

とまれ，大切な点はこうです。よしんば「神人」(「不可分・不可同・不可逆」という関係) に目覚めても，それはけっして終わりではない。人間は「超人」(ニーチェ) とはなりえないのです。その目覚めは，帰着点であり，また出発点です。「客体」に非ず，「主体」に非ず (動物に非ず，神様に非ず)，というそのはざまに，不断に立ち現れてくる偶像 (物神・人神) と，日々闘っていくほかにない，といえます。また，これが真の信仰者・「ただの人」の歩む道でしょう。とすれば，こういえるでしょう。脱何々教の道 (何らかのとらわれ，自縛からの解放の道)，そのための一人一人の日々の闘い，これが真の宗教の道だ，と。

とすれば，それは私のように舞い上がっている者 (「神人」の自覚を欠いた者) に必要な道です。舞い上がっていなければ，こうした「おしゃべり」はしなかったはずだからです。

注と参考文献

(1) Robert Tucker, Philosophy and Myth in Karl Marx (Cambridge at the University Press, 1961) P. 203.

(2) 岩瀬文雄『マルクスにおける経済と宗教』雁思社，1988年，36～53頁。上記タッカーについては，この本 (18頁) からの孫引。

(3) 柴田秀『ただの人・イエスの思想』三一書房，1996年，16～17頁。

(4) 滝沢克己『カール・バルト研究』著作集 2，法蔵館，昭和50年，『哲学・経済学論集』著作集，9，法蔵館，昭和49年，『現代の哲学』著作集，5，昭和48年，『バルトとマ

ルクス』三一書房，1981年。
(5) K．マルクス，大内，細川監訳『書簡集』マルクス＝エンゲルス全集，32，大月書房，1973年，『経済学批判』マルクス＝エンゲルス全集，13，大月書店，1964年，『資本論』マルクス＝エンゲルス全集，23，24，25，大月書店，1965年。
(6) T．ヴェブレン，小原敬士訳『企業の理論』勁草書房，1965年，『有閑階級の理論』岩波文庫，昭和40年。
(7) J．M．ケインズ，塩野谷九十九訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社，1941年。
(8) A．スミス，水田洋訳『国富論』世界の大思想，14，15，河出書房新社，昭和40年。
(9) M．ウェーバー，松井秀親（以下略）訳『宗教・社会論集』世界の大思想，II－7，河出書房新社，昭和43年。
(10) J．K．ガルブレス，鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』岩波書店，1970年。
(11) K．バルト，井上義雄訳『教義学要綱』新教出版社，昭和26年，小平尚道訳『信仰告白』新教出版社，昭和28年。
(12) 佐藤光著，『市場社会のブラックホール』東洋経済新報社，1990年
(13) Thorstein Veblen, The Instinct of Workmanship and the State of the Industorial Arts, New York : Augustus M. Kelley Publishers, 1964.
(14) C.S.Lewis, The Problem of Pain, Collins Fount Paperbacks, 1986. Mere Christanity, Geoffrey Bles, London, 1961.